



Title	共観福音書における身障と疾病
Author(s)	新谷, 光二
Citation	基督教学, 37, 27-30
Issue Date	2002-07-04
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46647
Type	journal article
File Information	37_27-30.pdf



おわりに

以上、イエズス会コレジヨの財源形態の概要を記してきたが、それが有する意義として、次の二点を指摘したい。

第一に、この種の研究を蓄積することで、中世修道会の経済活動に関する研究に加えて、近代修道会の経済活動についての研究領域が開拓され得ることである。

第二に、「経済」を紐帯として、国家と宗教とが不可分に結び付いていたことである。これは、各コレジヨの定収入の一部分を、ポルトガル国王給付金が構成していたことから判明する。しかしコレジヨの財源としてポルトガルの国庫が充当されていたことは、イエズス会の「修道会」としての在り方を規制し、イエズス会士たちは「修道会士」であると同時に、ポルトガル国王の「臣下」としても活動せざるを得なくなった。「この敵対者を征服するならば、国王陛下はかのマラッカ全域の絶対的支配者となられよう」という、イエズス会東インド巡察師ヴァリニャーノの言葉は、それを雄弁に物語っている。

研究発表要旨

共観福音書における 身障と疾病

新 谷 光 二

共観福音書のマタイは1～28章、マルコは1～16章、ルカは1～24章より成り立っている。しかし、生誕や十字架、復活、昇天の記載を除けば、イエス・キリストの福音宣教活動は、マタイでは4章から25章まで、マルコでは1章から13章まで、ルカでは4章から21章までとなる。これらの章節には後述の一部の箇所を除き、身障と疾病に関する記述は至る所に表われ、これらが人生の最大関心事であったことを物語っている。

この発表では、共観福音書における身障と疾病に関する記述の実態を明らかにし、そこから今日の課題を得ようとするものである。身障と疾病の記述の表れない章節はイエスの生誕、十字架等の章節の他に、山上の説教で

あるマタイ5―7章、たとえ話を中心であるマタイ18―19章、マルコ4章、ルカ12章、ルカ15―16章、説教、問答並びにたとえ話を含む問答の個所であるマタイ16章、マタイ23章、マルコ12章、ルカ20章などである。一般の民衆にとっては、身障、疾病の苦悩については癒されること、完治することこそが中心命題であった。従って、癒し、癒されるという具体的行動を伴わない言説には身障、疾病などは例示されていないのではないかと考えられる。

表れる具体的疾病名はてんかん、らい病、中風、長血（表現は別である）、不妊、水腫（ハンセン病の症状か）であり、他に色々な病氣と書かれていて、病名の特定できないものの、特に精神疾患を思わせるもの、単に病氣、病人と出てきたり、発熱、疫病など症状や一般的呼称（総称）も表れる。また、身障については、盲人、口の利けない人、耳の聞こえない人、足の不自由な人、手の萎えた人、体の不自由な人、腰の曲がった人等が表れる。これらを通じて明瞭なことは、目に見える異常、確認の容易なそれのみをいつていて、当時の非科学的医学知識

からは致し方のないことである。身障、疾病の原因の多くは悪霊もしくは汚れた霊によるものとされ、その悪霊の頭はベルゼブルで、また、多くの悪霊レギオンも表れる。特に、一度体から出されて戻って来た七つの悪霊とあり、これに取りつかれた人は最悪の状態になるとされる。口を利けなくする霊、ものも言わず耳も聞こえさせない霊、病の霊などの表現もありの、今日で言う病原菌のように、それぞれの病状に固有の悪霊があると考えていたことを窺わせる。身障や疾病のみならず、マタイ9章には「弱りはて、打ちひしがれている」との一般的状态の記述もあり、イエスはこれらにも同情をよせている。

福音書の記述では、身障や疾病、無氣力、塞ぎ、狂暴、狂気等の癒しはこれらの悪霊を追い出すことによつてなされた。それはガダラ人の癒しのレギオンなど（マタイ8章、マルコ5章、ルカ8章）に典型的に表れる。特徴的なのはハンセン病（らい病）の場合で、快癒は清くされるとの表現が用いられている。これはレビ記13章の症状による基準や続く14章の清めの儀式に発する考え方で

ある。レビ記では「重い皮膚病」となっていて、ハンセン病とはされていないが、古い翻訳ではらい病となっていた。いずれにしても、ハンセン病は特別であって、特に解決されるべき疾病であった。これに罹患すれば、共同体から外され、一人宿営の外で暮らさねばならなかった。レビ記には「隔離」という語彙が表れるが、これは病状の変化を観察するためであって、いわゆる感染防止の措置ではなかった。汚れているとされた場合は、隔離ではなく、いわば村八分、煎じ詰めれば人間失格を意味していた。このことは旧約時代から新約時代に至ってもなお同様であった。

イエスの病気に對する考え方は、一般に因果応報のごとく考えられていた時代に、そのような狭い考え方はとっていない。イエスの癒しには深い信仰と祈りを伴った。このことはイエスの弟子たちの癒しが成り立たないことを評しての「信仰が薄い」(マタイ17章)、「祈りが無い」(マルコ9章)とのイエスの言葉から知られる。イエスは祈りと言葉によって、悪霊を追い出し、疾病を癒した。共観福音書には特別な施術のようなものは表れず、イ

エスの衣に触れて癒される者があり、盲人の目に触って癒す、手を差し伸べて触って癒すなどのイエスの行為や、施術らしきものでは、弟子たちが油を塗って癒したこと(マルコ6章)、耳の聞こえず、舌の回らない人もイエスが耳に両指を差し入れ、唾をつけて舌に触ったことから癒された場合(マルコ7章)などがあるのみである。ヨハネ9章には、イエスが土に唾をし、捏ねて、それを目に塗って癒したとの記述がある。

身障、疾病を人間の罪のゆえに入り込んだ悪魔の業と考えるならば、これらの癒しは悪魔との闘いの勝利に他ならない。これは人間をその罪より解放し、病の結果たる死をも打ち砕くイエスの十字架の勝利、福音の到来を意味する。

イエスは悩める肢を憐れみ、同情を寄せて癒しの業を行った。それは身障者、病者に対する神の愛の具現に他ならない。共観福音書を見る限り、人による分け隔てはない。その実証として、共観福音書において癒しに入れた者の内訳を挙げることが出来る。おびただしいとか大勢などの表現が多く、具体的に人数が確認できるの

は31名である。その内訳は女性7名、男性5名、性別不明19名である。1名は女性にしか起こり得ない病、長血である。男尊女卑の時代にイエスが分け隔てなく対処していたことが分かる。男女協同参画社会の今日にも範となる状況であった。